

山下清と自閉症スペクトラム障害(アスペルガー症候群)に関する検討

山本 由佳^{*1}・石川 衣紀^{*2}・高橋 智^{*3}

特別ニーズ教育分野

(2015年9月15日受理)

1. はじめに

障害者の芸術は、日本において長い間、福祉の領域では療育の一環と捉えられ、芸術の領域からは正当な評価を受けずにきた¹。欧米においては、障害者や労働者、未開の地の人々などによる独学の表現はアウトサイダー・アート (outsider art) と呼ばれ、アートのジャンルとして確立されている。

しかし、日本では正統なアートではないという評価が一般的である。例えば、障害者は不幸であり何もできない、だからこそ「障害者アートは素晴らしい、感動する」といった評価や、「障害を乗り越えて」といったマスメディアの表現からも、純粋な芸術性をみるのではなく、「障害者の」芸術として作品をみていることがうかがえる²。

そもそも障害者の芸術が一般に注目されるきっかけとなったのは、1992年から1993年にかけて開催された展覧会「パラレル・ヴィジョン—20世紀美術とアウトサイダー・アート—」といわれている。日本においてもこの展覧会は、1993年に世田谷美術館で開催されて、話題をよんだ。

アウトサイダー・アートという言葉は、イギリスの美術史家ロジャー・カードナル (R. Cardinal) によって名付けられた。フランス語圏で用いられる「アール・ブリュット (art brut)」をさらに厳密に定義しようと、1972年に著書の題名とした用語である。

アール・ブリュットとは、直訳すると「生の芸術」「加工されていない芸術」という意味で、戦後フランスで活躍した画家ジャン・デュビュッフェ (J. Dubuffet) によって名付けられた。「精神障害のある人や幻視家などが制作した絵画や彫刻」を「芸術的教養に毒されていない人々が制作した作品」と定義されている。

1970年代から西欧において、これらの呼称が用いられ、障害者の芸術が注目され始めた。その中で、今日、最も一般的な呼び方はアウトサイダー・アートであろう。アウトサイダー・アートについて服部 (2003) は、現在様々な捉え方がされており、定義することは難しいとした上で、「既成の枠内をはみ出してしまう自由奔放さ」「美術教育とは無縁の作者たちが作り出すもの」と表現している³。アウトサイダー・アートという言葉に対する誤解として、否定的で差別的な意味をもつ言葉、障害のある人が制作した作品という意味にとられることがある。しかし、アウトサイダー・アートはそれらの作品を積極的に評価するものである。また、結果的に障害者の作品が多く含まれているが、障害者が制作した作品という意味の言葉ではない⁴。

西欧でアウトサイダー・アートが認知されたのは、デュビュッフェの成功やパウル・クレーをはじめとする表現主義、シュルレアリスムの画家たちに注目されたことが大きい。芸術家の注目や芸術家たちの作品への影響があったため、美術愛好家にも認知されるようになり、アートとして認知された。

1990年代以降、日本でも世田谷美術館、東京資生堂ギャラリー、ワタリウム美術館等の企画によって、ア

*1 東京学芸大学附属特別支援学校 (203-0004 東久留米市氷川台1-6-1)

*2 長崎大学教育学部 (852-8521 長崎市文教町1-14)

*3 東京学芸大学 特別支援科学講座 特別ニーズ教育分野 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

ウトサイダー・アートの知名度は上昇していく。日本において、アウトサイダー・アートという概念がなかった時代、いち早くアウトサイダー・アートに注目した日本人として、精神科医・式場隆三郎があげられる。式場は、後に「裸の大将」「日本のゴッホ」として親しまれた山下清を世に送り出した人物である。

しかし、日本においてアウトサイダー・アートは美術の領域での評価は依然として低く、アウトサイダー・アートをアートとして捉えていない現状がある。それは、「日本にはアウトサイダー・アートを積極的に関係し、価値を訴えるアーティストが存在」せず、福祉の向上や生活の改善を目指す式場の活動のみが突出していたからである。山下清が入園していた八幡学園の顧問医師であった式場は、「社会福祉の向上を目指す啓蒙家」としてアウトサイダー・アートを世間に広めた。

日本において最も有名な「知的障害の芸術家」として、山下清（1922-1971）があげられるだろう。山下清は「裸の大将」「放浪の画家」等の愛称で親しまれ、「両国の花火」「長岡の花火」などの貼り絵作品、また独特の手法を用いた油絵等の作品を世に残し、「日本のゴッホ」として賞賛された人物である。そのキャラクターは人気を呼び、山下清の生涯について映画・テレビドラマ・書籍によって多く紹介されてきた。しかし、一般における「裸の大将」等のイメージは実際の本人像とはかけはなれており、そのことに山下清自身、違和感をもっていた。

山下清の人気にともない、1958（昭和33）年には東宝映画「裸の大将」が封切られ、展覧会が開催され、1980（昭和55）年から1997（平成9）年までテレビドラマ「裸の大将放浪記」（関西テレビ製作、フジテレビ系放映）が放映される等、興行的には大成功をおさめた。映画やテレビドラマの内容は、山下清の放浪中のできごとを面白おかしく脚色し、「どこかとはけたところのある主人公・山下清がある日ふらっと町にやってくる。そのうちちょっとした騒動に巻き込まれながら、裸の大将が町の人びととふれあっていく」、そして山下清が放浪先で絵を描き、そこでの人との出会いや感動を残すというストーリーであった。しかし、山下清は、放浪中はほとんど絵を描いておらず、日記もつけなかった。八幡学園や実家にもどったとき、旅の印象をはり絵にし、思い出し、日記をつけていたのである。放浪中のできごとや風景を驚異的な記憶力で脳裏に焼きつけ、八幡学園に戻ってきてから作品にしたのであり、有名な貼り絵の制作ひとつをとっても、実際の制作過程とは異なる。

これまで紹介されてきた「山下清」像と本人との違いを遺族は指摘し続けてきたが、山下清の甥である山下浩（2000）は「どれも知的障害者としての山下清像が先行しすぎて」「そのイメージのもとに絵画作品も批評されていることは非常に残念」と述べている⁵。西垣（1996）はテレビ放映の「裸の大将」について、「芦屋雁之介の演技はフィクション」であり「純化された架空の幻像」であるとし、「心の汚れのない美しさを強調」するマスコミ・批評家に対し、強い疑問を呈している⁶。一般に伝わる山下清のイメージは、彼の生涯のごく一部でしかなく、それは第三者のみならず、山下清本人もその脚色されたイメージについて違和感を覚えていたのである。

独特のキャラクターで人気となった山下清であるが、彼の作品の美術領域における評価は低いものであった。服部（2003）は、日本において障害者の芸術は「美術の問題ではなく、教育の問題でしかなかった」ことが原因であるとしている。日本における「アウトサイダー・アート（outsider art）」は「大衆や知的障害者の教育という理念に飲み込まれてしまった」のであると⁷。

1995年に日本で「エイブル・アート（able art）」という言葉が生まれる。この言葉は、財団法人たんぼの家理事長である播磨靖夫が提唱した造語であり、「障害者を取り巻く社会環境の向上と、障害者教育の質的向上」を目指している。服部はエイブル・アートがめざしているものは「障害者の可能性（エイブル）のほうであって、アートそのものではない」と指摘する。

しかし、障害者の芸術も含むアウトサイダー・アートは、日本においてもその表現の価値が見直されてきている。西垣（1996）は、知的障害者は「感覚的に物を捉える強い一面」をもち、「周囲に伸ばされたアンテナ感度はきわめて敏感である」と述べ⁸、小出（1995）は、知的障害の人たちが描いた絵から「明らかに異質の磁力を感じた」とその芸術性を訴える⁹。小出はさらに「一般社会生活では劣性とみなされるハンディキャップ」があるゆえに「純粋性を指向し」、その「無垢な心と鋭敏な感覚を持ち続けている」ことは造形表現において有利であるとしている¹⁰。

トレファート（1990）は、日本の美術の才能をもつサヴァン症候群として山下清を取り上げている。サ

ヴァン症候群とは「きわめてまれな症状で、発達障害（精神遅滞）ないしは重篤な精神病（早期幼児自閉症あるいは分裂病）による重度の精神障害をもつ人間が、その障害とはあまりにも対照的に、驚異的な能力・偉才の孤島を有する場合を言う」とされている¹¹。その能力が現れる分野は、通常、カレンダー計算、音楽（ほとんどピアノと歌に限定される）、迅速な計算、美術（絵画、デッサン、彫刻等）、機械的な正確さ、桁はずれの記憶力である。サヴァン症候群全員に共通するのは顕著な記憶力であり、見たものをありありと思い出せる能力、「直感像の記憶」をもつ¹²。山下清も、放浪中にみた風景や出会いを放浪後に「直感像の記憶」で作品や日記に再現したと考えられている。

さて、以上に述べてきたことをふまえて、あらためて山下清を捉えなおすと、彼は果たして知的障害であったのかという疑問が浮かんでくる。山下清は八幡学園入園当時の頃の測定によればIQ68とされ、小学校3年生頃から知能の遅れが目立ってきたといわれている。しかし式場（1962）は「I・Qは正確に測れば、一生不変だとみられる。しかし、環境をよくし、教育よろしきを得れば、これも上達すると思う。……事実清のI・Qはいまはもっとあがってきている」と述べている¹³。

山下清の行動特徴に着目した時、山下清は自閉症スペクトラム障害、とりわけアスペルガー症候群の特徴に類似していることに気付く。村瀬（2006）は、山下清を自閉症あるいはアスペルガー症候群であった可能性を指摘している。「今の時代であれば、彼は『自閉症』と呼ばれる可能性」があり「アスペルガー型自閉症というようなことになるかもしれない」と述べている¹⁴。しかし、その根拠についての具体的な言及はない。

それゆえに本稿では、山下清の日記等の分析と作品の検討を通して、山下清が知的障害ではなく、自閉症スペクトラム障害とりわけアスペルガー症候群を有している可能性についての検討を行う。

2. 山下清の生涯

2. 1 児童期の山下清

山下清は、1922（大正11）年、東京市浅草区（現在の東京都台東区）に、大橋清治・ふじの長男として誕生した。清は3歳の時、風邪から重い消化不良になり、高熱を發した。その後遺症として軽い言語障害、知的障害がみられるようになったといわれる。

1928（昭和3）年、浅草の石浜小学校に入学し、その後、正徳小学校に転校する。この頃から山下清は昆虫の絵を描いていたといわれる。戸川（1940）が幼い頃の山下清について母親に聞いたところ以下であったという。

「三歳の頃、消化不良で歩けなくなり二ヶ月程でそれが治ってから少し吃りはじめた。子供の時から二錢三錢の小遣で決してお菓子を買はず切抜きを買って遊んだ。尋常一年の頃、いぢめられて暮した。いぢめられるので遠路をして家に帰つて来た。変わつていたため他人と一緒に遊ばず、遊ぶときには一人で遠くに行つた。兄弟喧嘩して怪我をさせたことがある。虫をとつては絵を画いていた。友達と遊ばず一人で虫をとつて画いていた。尋常三年のときボール紙細工で賞をもらつた。」¹⁵

1932（昭和7）年、父・清治が他界し、母方の姓「山下」となる。この頃から、山下清の知的な遅れが目立ち、学校でのトラブルが強まっていったといわれる。低学年の頃は人並みであった山下清の成績は学年があがるにつれて振るわなくなり、軽い言語障害とも相まって、級友からのいじめもひどくなっていった。母は再婚し、養父ができるが、家庭内暴力があった。山下清は思い出日記の中で、「乱酒家で家庭を顧みない養父を憎まず淡々と描写している」¹⁶。

「お父さんはお母さんにけんかをふっかけて 棒でびしゃびしゃお母さんの顔やももを紫色になるまで ひっぱたいて 殺してしまうと言ってお母さんは泣いてしまいました（略）僕の顔をけつとばして顔を血だらけにされてしまつて このお父さんは貰つたお父さんで本当のお父さんと違って他人だから乱暴だ」¹⁷。

山下清の日記は、感情表現を交えずに、文章が淡々と続いていくという特徴がある。学年が上がるにつれト

ラブルが増えていった山下清は、仲間関係をつくることができず、「狂暴で、興奮性の錯乱状態がみられ、ナイフを持って友人を傷つけ」るにまで至ってしまう。山下清はナイフを用いたことについて、以下のように日記に綴っている。

「人が僕をばかにして 色々なことを聞いたり自分の家に居た時の事を聞かれたり変な事ばかり聞かれたりするので僕はすぐ腹がたって相手をなぐる相手は五六人以上むかって来て、僕は幾ら頑張ってもかなわないので(略) ないふをふり回せば相手は逃げてしまうと思って(略) ないふはいいけんかの武器だと思ってしまいました」¹⁸

しかしナイフによる脅しも効かなくなり、大勢での攻撃については、相手に怪我をさせることとなる。1年に5、6回位傷を負わせてしまったという。山下清がいじめられていた原因について戸川は「低能といふことだけではなく彼の変つた偏屈な性質と、そして盗癖」が関係しているとする¹⁹。また上述のように母親は、幼い頃、山下清は変わっていたため友達と遊ばなかったとしている。

山下清について戸川(1940)は「偏屈で、のろくて、無口で、獨りぼっち」であり²⁰、ほとんど笑ったこともなく、家族への愛着も持っていないようであったと述べる。例えば八幡学園入園中に、母のところへ帰りたいかと聞くと、無表情に「帰りたい」と答えるものの感情がこもっていないように見えたり、弟が遊びに来た時に、いつまでも黙っていたことなどがあった²¹。

また山下清は、学年が上がるにつれて学習成績が振るわなくなっていたが、そのことを以下のように日記に綴っている。

「僕は一年生の時はせいせきがよかったけれども 二年や三年とたつ中だんだんせいせきが悪くなって 図画だけ甲で 五年になると図画は乙になって 読み方や算術や国史や地理は丙になりました……一年や二年の方は楽だけれども 五年六年は少し骨が折れました 勉強してる時電車や自動車やオートバイが通っててにぎやかだった」²²

「僕は六年生でちっとも勉強が出来ないので 六年のはむずかしくて むずかしくて 勉強は出来ないの で 友達は僕のことをばかにしてのうたりんとか言って からかったり ばかにしたりして 僕はしゃくに さわってしまいました」²³

山下清は児童期にはよく虫捕りにいっていたが、汽車道脇の野原で虫取りをしていたときのエピソードがある。仲間は工夫が来ると逃げるのであったが、山下清は「虫取りにむちゅうになって工夫がきたことに気がつかない」のでよく捕まっては怒られていた。山下清の虫への関心や熱中ぶりは特徴的である。

1934(昭和9)年5月、山下清は12歳の時、知的障害児施設「八幡学園」に入園する。山下清が学園に来た時、直接指導した八幡学園主事の渡辺実は「大変なヤツが入ってきた」と思った。山下清はウフフと笑いながら、彼の足の先から頭の先までじっと見つめていたという²⁴。山下清は八幡学園で貼り絵と出会う。八幡学園では情操教育の一貫として指で色紙をちぎって貼り付けていく「ちぎり絵」をとり入れていた。ちぎり絵との出会いを山下清は以下のように書き残している。

「僕は学園へ来てから 色紙で絵を貼るのは初めてで 色紙で絵を貼るのは珍しく思っていました」²⁵

学園生活において、山下清は友達とは遊ばず「バッタやイナゴの感触を楽しんでいたり、机の中に飼っているカエルと長いことならめっこしていた」りしていた。そして山下清の虫の絵は「決して先生や友達に見せる為の絵ではな」かった²⁶。

入園後もしばらくは突然の暴力があり、「畑作中の二十五歳の成年者に對して鋤の一撃を與へたこと」もあった。また、他の子どもの衣服をどぶに捨てたり、果物を近くの畑から盗んできたりと問題が絶えなかった。一方で、山下清はとても臆病な面も持っていた。その対象は、戦争や爆撃、お化けや鳥の羽であり、「色々な病的恐怖を持つていて一寸おどされても蒼くなつて震へ上」り、鳥の羽を近づけると「丁度毒蛇にでも触つ

た様に身を遠ざけ」た。八幡学園に入園し、しばらくすると「残忍過激な性行を全く消失させたが臆病の方はなかなか根絶」されなかった²⁷。

2. 2 特異児童・山下清

1937（昭和12）年、早稲田大学心理学教室名誉教授であった戸川行男が、山下清を中心とする八幡学園在園児童の作品を取り上げた「特異児童作品展」を開催し、大盛況となった。「特異児童」とは戸川らによる造語であり、「低能児、しかも絵がすばらしい。この矛盾を説明する煩を省くために特異児童という言葉が便利に思えた」ため『「特異児童」』という言葉を作り出した」という²⁸。

「特異児童作品展」によって注目された山下清は、1939（昭和14）年、東京・銀座の画廊で個展を開くこととなった。「17歳の少年画家」による個展は大きな反響を呼び、山下清の作品は画家・大下藤次郎の創刊した美術雑誌『みづゑ』に特集が組まれるほどであった。また当時の日本画家の第一人者であった安井曾太郎や梅原龍三郎からも、山下清の作品は絶賛された。当時の山下清の様子を、戸川は「実際の学力は昭和九年入園時から殆んど進歩なく算術は尋二年か三年前期が関の山で読み書きは今少し出来るが、たどたどしい。大体、十歳前後の子供が持つ頭の程度とみて置いたら間違ひない」²⁹と述べている。

1940（昭和15）年11月18日、18歳の山下清は突然姿を消した。それから1955（昭和30）年までのおよそ15年間、「放浪」を続けたのである。放浪中も山下清は、実家や学園に数回戻ってきた。放浪中（1940～1955）の行動は、次のようなものであった。

表1 山下清の「放浪」概要（1940～1955）

期 間	主な行動
1940年11月～1943年5月	千葉県各地を放浪。
1943年5月～10月	母の家（東京都新宿区）に戻る。
1943年10月～12月	八幡学園にて作品制作を行なう。
1943年12月～1946年1月	千葉県各地を放浪。
1946年1月～6月	母の家に戻る。
1946年6月～1947年5月	千葉・埼玉・栃木を放浪。
1947年5月～8月	母の家に戻る。
1947年8月～1948年3月	千葉・埼玉・栃木を放浪。
1948年3月～6月	母の家に戻る。
1948年6月～1949年1月	千葉・埼玉・栃木・茨城・福島を放浪。
1949年1月～5月	八幡学園にて作品制作を行なう。
1949年5月～9月	千葉・茨城・福島・栃木・群馬・新潟・長野を放浪。
1949年9月～1950年5月	八幡学園にて作品制作を行なう。
1950年5月～11月	千葉・埼玉・茨城・福島・栃木・群馬・山梨を放浪。
1950年11月～1951年5月	八幡学園にて作品制作を行なう。
1951年	千葉・茨城・福島・宮城・山形・福島・栃木・群馬・東京・神奈川、（熱海→門司まで汽車で移動）、福岡・大分・宮崎・鹿児島を放浪。
1952年	鹿児島・熊本・福岡、（門司→東京まで汽車で移動）、千葉・茨城・栃木・群馬・新潟・山梨、（東京→門司まで汽車で移動）、福岡・大分・宮崎・鹿児島を放浪。
1953年	鹿児島・熊本・福岡・山口・広島・岡山・兵庫・大阪・京都・岐阜・福井・石川・富山・新潟・富山・石川・福井・京都・大阪・兵庫・岡山・広島・山口・福岡・大分・宮崎・鹿児島を放浪。
1954年1月～4月	八幡学園にて作品制作。
1954年4月～12月	関東・甲信越・近畿・四国・九州を放浪。
1955年1月～6月	九州・山陰・近畿・北陸・東北・北海道を放浪。

山下浩（2000）『家族が語る山下清―夢みる清の独り言―』pp.59-61より作成

1953（昭和28）年、アメリカのグラフ雑誌『ライフ』が山下清の行方を追い始めたことから、朝日新聞が全国の支局を通じて山下清を捜索にかかった。翌年には朝日新聞に捜索記事が掲載され、1954（昭和29）年1月、鹿児島で山下清は発見された。ここから「日本のゴッホ」と掲載された山下清に再び大きなブームが訪れる。

2. 3 放浪後の山下清

1956（昭和31）年に開催された東京・大丸百貨店での「山下清展」は大反響を呼び、入場者は80万人を超えた。その翌年には、母・辰造、妹・愛子とともに世田谷に住み始める。同時に、知名度が上がったことにより、どこへ行っても「山下清」だとわかってしまう山下清の放浪は、終止符を打つこととなった。

この年、記録映画「はだかの天才画家山下清」（日本映画新社）が公開された。さらに全国約50ヶ所で「山下清展」が開催される。翌1957（昭和32）年には東宝映画「裸の大将」が封切られ、山下清はいっそう有名人となった。

「自由奔放な放浪生活のなかで周囲を意識せずに自分の気持ちをストレートに表現し」ていた山下清の言動は、「マスコミからユニークなキャラクターとして脚光を浴び」るようになっていき、「しだいにその言動だけが新聞や雑誌などでおもしろおかしく書かれることが多く」なっていった³⁰。山下清は、当初は映画化された「山下清」と自分とのギャップに戸惑っていたが、自分がどのようにみられているかを知った上で、周囲が喜ぶようにわざと面白いことを言っていたという。

自宅での山下清は、置物の場所が自分の決めた位置から少しでもずれていたら直し、起床や食事、就寝の時刻もきっちり守るなど、とても几帳面であった。作品の制作時間も細かく自分で決めており、そうした几帳面さ・こだわりは、自閉症スペクトラム障害の特性である固執性とも考えられる。

テレビ番組への出演、映画の放映、作品制作など多忙な日々が続いたが、1969（昭和44）年に「東海道五十三次」の取材を終えて以降は制作に専念していた。しかし、山下清は高血圧による眼底出血を起こして倒れ、以後は制作活動を制限し、自宅で療養生活を続けていた。1971（昭和46）年7月12日、脳出血で倒れた山下清は永眠する。49歳であった。

3. 山下清におけるアスペルガー症候群と推察される行動特徴

3. 1 「対人関係の困難」

山下清の「対人関係の困難」が示されている行動特徴を表2にまとめた。

山下清は、母の回想によれば、小学校入学前、友達と遊ばず弟と虫をとってきては絵を描いていた。小遣いをもらっても、駄菓子屋で菓子を買わずに切抜き絵を買っていたという。幼少時から、一人もしくは弟とのみ遊んでいたことがうかがえる。小学校に入った山下清は、学年が上がるにつれてトラブルが増えていく。小学校の3年頃から学習の遅れが目立ち、劣等感が強くなり、乱暴になっていった。同級生からのいじめを受け始めた山下清は、ナイフを持ち出し、相手に傷を負わせるようにまでなってしまう。このことは、発達水準に相応した仲間関係をつくることの困難と考えられるだろう。

山下清は話しかけられなければ自分から話すことのない人物であったと、晩年にテレビ共演をした出演者から語られている。その一方で同じことを延々としゃべる癖があったことも、テレビドラマで山下清役を演じた芦屋雁乃助が述懐している。あるときタクシーに乗り、弟にこの場なら話していいかと確認し、了解を得ると「いまは、こんなに汗が出るぐらい暑いな。だけど、タクシーに乗ったら冷房がきいてて寒いな。（中略）涼しいんだと人間が騙されてるんだな。だから、これはさつねタクシーだな」（傍点原著者）と同じことを延々と続けて語っていたという³¹。

山下清の性格について、式場は「実際はなかなか頑固で、容易に自説を曲げない。決心したことは、きつとやる。孤独になれたのか、人なつこいところはない」「表情に乏しい」「概して無口で、一緒にいても自分から話しかけるようなことは少ない」「子どもっぽくても無邪気なところはない」「従順であり人に言われたことは素直にやる」と述べている。

表2 山下清の「対人関係の困難」に関する行動特徴

時期	「対人関係の困難」に関する行動特徴	文 献
児童期	友達とは遊ばず、虫をとってきては絵を描く。	1) p.28
	友達と遊ばず、弟と一緒に毎日虫取りにでかけた。	4) p.185, p.253
	「僕はしゃくにさわって相手をなぐりかえしたり ぶちかえしたりして」	4) p.282
	脅しでナイフをつかっていたが、脅しだとわかれたことに腹を立て、相手に傷をつけてしまった。一年に5, 6回くらいやった。	4) p.283
青年期	隣保館にいたとき「友達は僕のことをばかにしてのうたりんとか言って からかったりばかにしたりして」困っていた。	4) pp.256-257
	養父の家庭内暴力を淡々と日記に書く。	1) p.26
	八幡学園で「けんかをした時かんしゃくをたてて 小さいしゃべるで竹村君の頭をたたいて大けがをさせました」	4) p.277
	子どもに馬鹿にされたりからかわれたり悪口をいわれる。	1) p.74, p.96
	冗談を言うと、言葉通りに受け取って本気になる。	1) p.136
	養父について「このお父さんは貰ったお父さん」と発言。	1) p.352
	仕事先で「ゆうずうがきかない」と言われる。	1) p.367
	東京大空襲の惨事の様子をありありと書く。	1) pp.487-489
	終戦時、天皇陛下が泣いていて「おかしいな」と思う。	1) p.514
	どうして笑わないのかと聞かれ「おかしくても笑えない」と発言。	2) p.208
	「よく見ると おれのお母さんの親でした」と発言。	3) p.299
	人が通らないと思って、暑いとき裸で歩く。	4) p.131
	世間がもてはやしても少しも動じず、喜びもしない。	1) p.38
	泣くことがなく、笑うことも苦手である	6) p.18
	いい景色はわりと覚えていられるが、人のことはあまりよく見ないので特徴がわからない	6) p.45
	いそいでついていこうとしたら、いつの間にか靴を脱いでいて靴下だけで歩いていこうとした	7) p.53
	人物は苦手なのであまりかかない。ことに裸の人物は苦手。	7) p.84
	人間の絵は苦手。人物は景色と違っていつまでもじっとしていてくれないので	7) p.182
	鏡をみてかいているうちに自分の顔だということを忘れる。	7) pp.185-186
	地図をみるのがすき。鉄道地図が一番すき。	7) p.140
	ロンドンでもみんなと一緒にだったので、一番みたいところをみるができなかった	7) p.143
	ひとりで旅行していたころからやかましいのは苦手	7) p.145
	相手が誰であろうと合わせることができずマイペースをくずさなかった。	5) p.1
	子どものペースに合わせることが苦手で、すすんで子どもと遊ぼうとしなかった。	5) p.26

出典：1) 山下清（1979a）『裸の大将放浪記 第一巻』ノーベル書房、2) 山下清（1979b）『裸の大将放浪記 第二巻』ノーベル書房、3) 山下清（1979c）『裸の大将放浪記 第三巻』ノーベル書房、4) 山下清（1979d）『裸の大将放浪記 第四巻』ノーベル書房、5) 山下浩（2000）『家族が語る山下清—夢みる清の独り言—』並木書房、6) 山下清（1998）『日本ぶらりぶらり』筑摩書房、7) 山下清（1994）『ヨーロッパぶらりぶらり』筑摩書房

山下清の甥である山下浩は「相手が誰であろうと合わせることができずマイペースをくずさな」い、「笑う時はあまり大笑いすることがなく『クックック』と含み笑い」をしていたと回想する。

以上のことから、山下清には対人関係の困難があったと考えられる。

3. 2 「こだわり」

山下清の「こだわり」が示されている行動特徴を表3にまとめた。

山下清の日記の中には、以下のように虫を題材にしたものが複数みられる。緻密な観察力で詳細に記述した文章から、虫への関心の強さが伺える。

「こおろぎは六本足の中 後の足が二本長いので この二本の足で飛んで歩くのです ひげもとても長く

表3 山下清の「こだわり」に関する行動特徴

時期	「こだわり」に関する行動特徴	文 献
児童期	虫をとってきては絵を描き続けた。	1) p.28
	自動車での虫取りは、みんなは工夫が来ると隠れるが、「僕は虫取りにむちゅうになって～工夫が来たのを気がつかない」ので怒られる	4) p.260
青年期	貼り絵に没頭するにいたっておとなしくなった。	1) p.37
	仕事に「むちゅうになって小さい声がはっきり聞こえない」	1) p.166
	きれい好きを通り越している。	1) p.459
	「清の仕事は馬鹿でいいいで仕事がおそい」	2) p.141
	絵の裏には制作日時、時には休憩時間を書き込む。文章も貼り絵も一面をうめつくす。	1) p.33, p.47
	夜寝る前にひとりでおもちゃとあそぶのが好き。遊んだおもちゃをきちんと棚の上に並べる	7) p.23
	好きなもの、自分が気に入ったものに対する入り込み方は異常ともいえるぐらいだった。	5) p.18
	超がつくほどの几帳面な性格。	5) p.2
	作品を制作するときも自分で決めた作業時間を忠実に守る。	5) p.94
	自分の体を大切に、ありとあらゆる健康法を試していた。	5) p.3, p.92
	話をする時は点やマル、カッコなどと言わないという理由で句読点はつけずに文章をかく。	5) p.53
	自分で決めたことが予定通りに進まないときは、機嫌が悪くなる。	5) p.82

出典：1) 山下清 (1979a)『裸の大將放浪記 第一巻』ノーベル書房、2) 山下清 (1979b)『裸の大將放浪記 第二巻』ノーベル書房、3) 山下清 (1979c)『裸の大將放浪記 第三巻』ノーベル書房、4) 山下清 (1979d)『裸の大將放浪記 第四巻』ノーベル書房、5) 山下浩 (2000)『家族が語る山下清—夢みる清の独り言—』並木書房、6) 山下清 (1998)『日本ぶらりぶらり』筑摩書房、7) 山下清 (1994)『ヨーロッパぶらりぶらり』筑摩書房

て (中略) 頭は大きくて 大きな目が二つに 口は大きく かまれるといたいけれども毒はない 羽は四枚あって うすい羽二枚に かたい羽二枚で うすい羽は広い そしてうすい羽はやわらかい この羽で飛ぶのはめったにない 大てい足でとびます」³²

山下清の丁寧な仕事ぶりは、良く悪くも評価されている。ほめられることもあれば、一方で、「きれい好き過ぎ」「清の仕事は馬鹿丁寧」など、度が過ぎると思われていたこともあった。また山下清は、一つのことに夢中になっていると他のことに気がつかない一面もあった。幼少時に線路脇で虫捕りをしている際に、他の子どもたちは線路工夫がくると隠れるが、山下清は虫捕りに夢中で線路工夫が来たことに気がつかず、怒られてしまったことがある。成長しても作業に「むちゅうになってて小さい声がはっきり聞こえない」と日記に綴っている。

山下浩は晩年の山下清の様子を、相手が誰であろうと合わせることができず、マイペースをくずさなかったと振り返る。作品を制作するときも自分で決めた作業時間を忠実に守り、自分で決めたことが予定通りに進まないときは、機嫌が悪くなったという³³。また例えば、犬の散歩は30分くらいがいいと医者から聞いた山下清は、正確にその時間を守り、20分ほどで散歩が終わってしまった時は、家の前で30分になるのを待ってから家のなかに入っていたという³⁴。

また、勝負事への執着も特徴としてあげられる。山下浩は山下清と将棋やトランプで遊んだ時、「たまに私が勝つと、今度は叔父が勝つまでやめさせてくれません。とにかく負けず嫌いで、勝ち逃げは許されません」と、山下清の負けず嫌いの一面を回想している。相手が子どもといえども絶対に手を抜かずに勝つまでやり続け、また勝ち目がありそうな人である子どもや女性を対戦相手として選んでいた。このようなこだわりは生涯にわたって続いていた。

3. 3 「良好な知的発達」

山下清は知的障害者といわれている。「重い消化不良にかかり3ヵ月後に完治するが、吃音、知的障害となる」と言われており、吃音は生涯続いた。学習成績も山下清自身が「一年生の時は成績が良かったが、二年や三年たつと段々悪くなっていった。図画だけは甲だったが、五年になると乙になって、読み方や算術、国史、地理は丙になった」と述べているとおり³⁵、小学校3年頃から振るわなくなった。

しかし、山下清が知的障害を有していることについては、多くの疑問点がある。山下清の「良好な知的発達」が示されている行動特徴を表4にまとめた。

表4 山下清の「良好な知的発達」が示されている行動特徴

時期	「良好な知的発達」が示されている行動特徴	文 献
	逃げ出す計画をたて、嘘をついて放浪を始める。	1) p.59
	「僕はあんまりべらべらしゃべるので」少し黙るように言われる。	1) p.108
	「自分の都合のいいときは頭がいい」と言われる。	1) p.306
	「その位よくしゃべるんだから頭が悪くない」と言われる。	2) p.306
	徴兵検査で読める字を読めないふりをする。	2) pp.306-307
成人期以降	「頭が悪いので本当の年を言うと恥をかくからうそをいう」	1) p.195
	まじめで縫い物上手。昼間も夜も良く働く。	1) p.458
	「清は正直だ けっして人のものを取らない」といわれる。	2) p.14
	「弁当屋の主人が心ばいしてしまうだろうと思って」早く帰るなど気遣いをする。	2) p.16
	「頭が悪いというのはうそだろう」「馬鹿なふりをしているんだろう」と駅員にいわれる。	2) p.86
	「うたのふしはへただからうたと人に笑われると思って」うたわない	2) p.160
	放浪癖、仕事嫌い、物乞いはしたが盗癖はなかった。	4) p.421
	奉公先で辛抱ができず家へ帰ってきたと思われて恥をかかないよう、わざと暗くなるまで待ってから目立たないように帰る。	2) p.258
	「話をしていると頭が悪そうじゃないな」といわれる。	3) p.330
	退屈を紛らわすため、よその人と話す。	3) p.340
	「それだけしゃべりゃ頭が悪くない」と駅員にいわれる。	3) p.354
	「それだけしゃべりゃ頭が悪くないよ。(略) 自分が頭が悪いといって馬鹿なふりをしているんじゃないのか」と巡査にあやしまれる。	3) p.383
	「生まれつき頭が悪くて」が「生まれつき体が弱いので」に変わる。	3) p.428
	「お前の話を聞いていると、お前は頭がいい所もあれば頭の悪い所もある」といわれる。	4) p.69
	「絵を書いているのをみたりお前の話を聞いているとお前は頭がいい所もあれば少し頭が悪い所もある」とおじさんに言われる。	4) p.86
	「むずかしいことを聞くから困ってしまう」といわれる。	4) p.88
	「お母さんに会って見たいとはたまには思う時もあります」	4) p.98
	めしをくれとばかり言っている乞食はへた。僕ならよくそのわけをはなして、どうしてもくれないなら次へいく。	6) p.40
	放浪中、警察に捕まって調べられた時に、あやしまれないように、すらすら話す稽古をしておいた。	6) p.78
	マスコミに注目されるようになると、自分がどう扱われているかとても気にするナイーブな一面もあった。	5) p.3, p.72
	人を喜ばせたいために、おもしろいことを言ったり、いたずらをしたり、流行語にもなった「兵隊の位に直すと…」をわざと言うようにしていた。	5) p.72, p.81, p.134
	「まわりの人がおもしろいことを言うのを期待してるから、そこがときどきつらい」	5) p.75
	おもしろおかしく演じられることに抵抗があった。自分のコンプレックスを意識して、誇張された「どもる」演技を気にかけていた。「僕はあんなにどもらない」	5) p.117, p.120
	大変おしゃれで服装に気を使っていた。	5) p.3, p.125

出典：1) 山下清 (1979a)『裸の大將放浪記 第一巻』ノーベル書房、2) 山下清 (1979b)『裸の大將放浪記 第二巻』ノーベル書房、3) 山下清 (1979c)『裸の大將放浪記 第三巻』ノーベル書房、4) 山下清 (1979d)『裸の大將放浪記 第四巻』ノーベル書房、5) 山下浩 (2000)『家族が語る山下清—夢みる清の独り言—』並木書房、6) 山下清 (1998)『日本ぶらりぶらり』筑摩書房、7) 山下清 (1994)『ヨーロッパぶらりぶらり』筑摩書房

戦争への恐怖心が強かった山下清はなんとか徴兵検査を逃れようと、目が悪いふりや耳が聞こえないふり、字が読めないふりなどを試みている。このようなエピソードは、山下清の知的能力が低くなかったことを示しているといえるだろう。さらに、山下清の放浪が開始から終了まで毎回綿密に計画されたうえで実行されたものであったことも、また同様のことを示している。

放浪中にメディアにとりあげられて山下清は一躍著名画家となり、映画やテレビドラマでも山下清の半生が描かれるようになっていくが、その内容について山下清は戸惑っていた。とりわけ、作品の随所で見られた大げさな表現に対して、「僕はあんなことは言わない」「あれは僕じゃない」「僕はあんなにどもらない」と意見している。またテレビのパラエティー番組に出演した際には「前もって家族に服装のセンスや持ち物がおかしいかどうか」「番組が終わってから、自分の話し方・内容を家族に確認し」て、指摘されるとどこがおかしかったのか納得するまで聞き入ったという。

このようにして、幼少期に多く見られた対人関係でのトラブルは成長とともに減少し、一方で「良好な発達」は増えていった。

3. 4 「心の理論」の困難

山下清が「心の理論」に困難を抱えていた可能性が示されている行動特徴を表5に示す。

表5 山下清の「心の理論」の困難が示されている行動特徴

「心の理論」の困難が示されている行動特徴	文献
新宿駅で「新宿駅前」がわからず警察で調べられる。	1) p.356
「魂を入れてやれと言うのはどんなことだろう」	2) p.236
知り合いから声をかけられて「用もないのに呼ぶ必要はないと思います」と発言。	2) p.408
先生と何メートルくらいなら離れていいかきめなければならない	7) p.17
「死んでからみんながゴッホはえらいといっても死んでいるゴッホには聞こえない」	7) p.164
世話になった札をいったらという、お札はそのときいっているはずと発言。	式場 (1961) p.49
どうしても死んでから先のことがどうなるのか知らないから仏様のこともさっぱり興味が無い	6) p.160
お宮やお寺をおがんでもどうなるのかよくわからないのでおがまない	6) p.174
どうしてサインをすると喜ぶのか分からない。家族がサインを頼まないのに、なぜ知らない人が頼むのか。	6) p.189, 191
「ばくも話を聞いただけでは信用できないたちで、ほんとの景色をみるために、あちこちで放浪して歩いたのです」	7) p.40
りすを呼んだら、そばによってきたので「このリスは日本語がわかる」	7) p.64
人間は裸になることができないくせに、石や銅の像になると男でも女でもパンツもはかないので、それをみんなで感心してみているのはどういうわけだろう。	7) p.80

出典：1) 山下清 (1979a)『裸の大將放浪記 第一巻』ノーベル書房、2) 山下清 (1979b)『裸の大將放浪記 第二巻』ノーベル書房、3) 山下清 (1979c)『裸の大將放浪記 第三巻』ノーベル書房、4) 山下清 (1979d)『裸の大將放浪記 第四巻』ノーベル書房、5) 山下浩 (2000)『家族が語る山下清—夢みる清の独り言—』並木書房、6) 山下清 (1998)『日本ぶらりぶらり』筑摩書房、7) 山下清 (1994)『ヨーロッパぶらりぶらり』筑摩書房

放浪中、「うっかり清にじょうだんをいうと本気になる」といわれたり、工作中、魂をいれて仕事をするようにいわれた際に「魂を入れてやれと言うのはどんなことだろう 魂は目に見えないんだから」と返したりしていたことが挙げられる。また、食事中にポタージュをスプーンですくって「人間の頭が割れたらこういうものが出てきます」などと話していたエピソードがあり、周囲はみな食べられなくなるのだが、ステーキは「腕の切り口」などと克明に喋っていたという。カレーライスが出るとよく轢死体の話をしていたというが、一緒に食事をしている人がいやな顔をするのを不思議そうに眺めていたそうである。

成長するにつれ、自分の考えと相手の考えの違いに徐々に気付いていく。例えば、小説に出てくる人の年齢や体重を聞いたらかからないといわれ、なぜ他者は気にならず、聞かないですむのかが不思議でならず、詳しく聞きたいが恥ずかしくて聞けないと日記に記している³⁶。また「自分のいきたいところにぶらりとでかけるのは、そんなに悪いことではないような気がするのですが、世の中には放浪ということは悪いことだというきめがある」ので、世の中のルールを守るようにしている。しかし、本当は放浪の最中には楽しく「おかしな話はいくらもあるが、人はそれをおかしがらないでいる」ことを不思議に思っているのである。

以上に検討した行動の特徴から推察して、山下清が自閉症スペクトラム障害、とりわけアスペルガー症候群を有していた可能性が高いと思われる。

4. 山下清の作品の検討

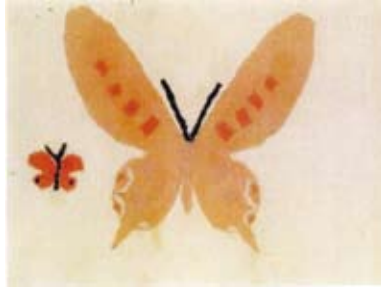
4. 1 山下清の作品の変遷

山下清の作品には、成長・発展が見られ、とりわけ八幡学園時代の発達ぶりは大きい。ここでは山下清の作品を取り上げ、経年のなかで作品にどのような変化がみられるのかを考察していく。

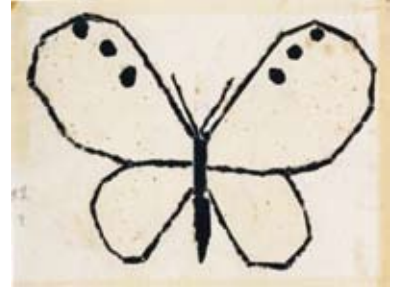
1934（昭和9）年 12歳



①「とんぼ」（貼絵）



②「蝶々」（貼絵）



③「蝶」（貼絵）



④「せみ」（貼絵）

出典：山下浩監修（2011）『山下清展』山下清作品管理事務局（①p.10, ②p.8, ③p.10, ④p.9）

八幡学園入学当初の山下清の作品は、虫が多く描かれ、人物は描かれていない。山下清は虫好きであり、友だちと遊ばず、いつも虫や蛙と戯れるようにしていたという。山下清が虫に強い興味関心を向けていたことが作品からもうかがえる。

1935（昭和10）年 13歳



①「クリスマス」（貼絵）



②「餅つき」（貼絵）

出典：①池田満寿夫・式場俊三（1993）『裸の放浪画家・山下清の世界—貼り絵と日記でたどった人生』, p.14。
②山下浩監修（2011）『山下清展』, p.12。

人物が表現されはじめるが、その表現はまだ幼いといえる。この「クリスマス」と「餅つき」では八幡学園での行事が描かれているが、複数いたと思われる人物は一人のみ描かれている。

1936 (昭和11) 年 14歳



①「剣道」(貼絵)



②「寝る支度をしているところ」(貼絵)

出典：山下浩監修 (2011)『山下清展』(①p.13, ②p.14)

複数の人物が描かれてくる。よく描かれるのは自分や友人、身近な先生である。奥行きに関しては、画面の下方が手前、上方が奥といった構図である。多視点からの絵が同時に描かれる方法を多視点画法とよぶが、1937 (昭和12) 年頃まで、この方法が見受けられる。また興味関心のあるものは強調・拡大して描く拡大描法もみられ、「剣道」にそれが確認できる。

1937 (昭和12) 年 15歳



①「柔道」(貼絵)



②「寝るところ」(貼絵)



③「農園」(貼絵)



④「観兵式」(貼絵)



⑤「上野の地下鉄」(貼絵)



⑥「二重橋」(貼絵)



⑦「鉢花」(貼絵)



⑧「湖畔」(貼絵)

出典：山下浩監修（2011）『山下清展』（①p.16, ②p.18, ③p.25, ④p.44, ⑤p.24, ⑥p.19, ⑦p.35, ⑧p.29）

「柔道」では、右側に座っていると思われる生徒が寝ているように描かれ、多視点画法である。「寝るところ」では、ふとんと生徒の重なりが見受けられる。大小の割合に矛盾はあるものの、ものとももの形の重なりや立体的表現が現れ、奥行きや遠近感を出すなど空間的表現も現れてくる。また「農園」「上野の地下鉄」「二重橋」「湖畔」では風景が描かれ始めており、山下清の視点が外に向かい始めていることがうかがえる。

1938（昭和13）年 16歳



①「ともだち」(貼絵)



②「栗」(貼絵)



③「いけ花」(貼絵)



④「ゆり」(貼絵)



⑤「鉄条網」(貼絵)



⑥「遠足」(貼絵)

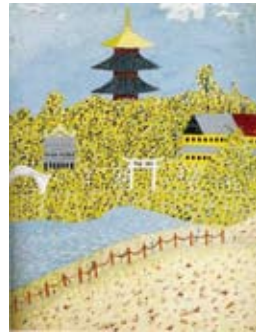
出典：山下浩監修 (2011)『山下清展』(①p.30, ②p.36, ③p.37, ④p.35, ⑤p.47), サンマーク出版
編集部編 (2000)『山下清のすべて—放浪画家からの贈りもの』(⑥p.12)

しっかりとした描写力を持って表現されるようになる。重なりや奥行きなどの空間関係が確立し始めている。また「ともだち」や「栗」では、古切手を用いたり、紙をこよりにしたりするなど、この頃から山下清独自の工夫がみられる。「遠足」では、広々とした景色が描き出されてくる。

1940 (昭和15) 年 18歳



①「練兵場へ遠足」(貼絵)



②「上野の五重塔」(貼絵)



③「活動写真を映しているところ」(貼絵)

出典：山下浩監修 (2011)『山下清展』(①p.34, ②p.57), サンマーク出版編集部編 (2000)『山下清のすべて—放浪画家からの贈りもの』(③p.14)

空間の割合の矛盾点がなくなっており、人物像もしっかりとしてくる。

1943 (昭和18) 年～ 21歳～



①「秋の麒麟草」(1943年・21歳) (貼絵)



②「神宮外苑」(1950年・28歳) (貼絵)



③「金町の魚釣り」(1950年・28歳)(貼絵)



④「長岡の花火」(1950年・28歳)(貼絵)



⑤「花火」(1957年・35歳)



⑥「スイスの町」(1963年・41歳)(貼絵)



⑦「ハイデルベルグの古城」(1964年・42歳)(貼絵)



⑧「お蝶婦人屋敷」(1964年・42歳)(貼絵)

出典：山下浩監修（2011）『山下清展』（①p.59, ②p.62, ③p.63, ④p.92, ⑥p.99, ⑦p.95），式場隆三郎編（1961）『山下清・日本の風物』（⑤p.23），サンマーク出版編集部編（2000）『山下清のすべて—放浪画家からの贈りもの』（⑧p.29）

4. 2 山下清の作品の特徴

寺山（2002）は自閉症児の描画表現の特徴として、①限られた対象への関心の強さ、②視覚記憶の特徴を反映した写実的な表現、③独特な絵画表現、④イメージの合成・展開、⑤感情の表出の5点をあげている³⁷。

山下清は、その特徴をほぼ満たしているといえる。山下清の特徴を上記5点にあてはめると、以下の点が指摘できる。①山下清は虫への関心が強い。また「花火」を繰り返し描いた。②記憶力を生かした写実的表現がほぼ全作品に見受けられる。③風景画は全体を細部まで捉えているものの、単純化・簡略化が見受けられる。④「花火」の各作品や「田舎の精神病院」では時間の経過がみられる。⑤感情の表出では、水に溺れた時の苦しかったことを鉛筆画にしているが、苦しそうな表情まではみられない。また他者の泣いている顔は描いているものの、笑っている顔や自分の感情の表出は見られない。



①「パリのエッフェル塔」
(1961年・39歳) (水彩画)



②「富田林の花火」
(1969年・47歳) (貼絵)



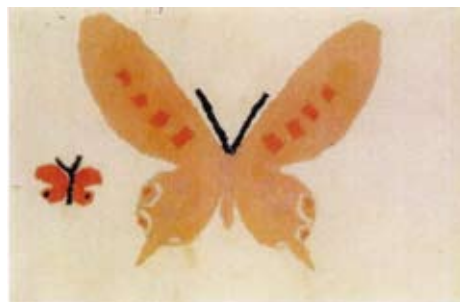
③「水に溺れた時の事」(1954年・32歳) (鉛筆画)

出典：山下浩監修 (2011)『山下清展』(①p.110, ③p.52), 池田満寿夫・式場俊三 (1993)『裸の放浪画家・山下清の世界一貼り絵と日記でたどった人生』(②p.5)

八幡学園に入園した1934(昭和9)の山下清の作品は、「あしなが蜂」「蝶々」等、虫や花など、身近なものを題材にした作品を多く残している。山下清の帽子が動いていると思ったら蛙が入っていたり、学園のほかの子どものふとんから頻繁にカタツムリや蛙が出てくることもあったという。



①「あしなが蜂」(1934年・12歳) (貼絵)



②「蝶々」(1934年・12歳) (貼絵)



③「黒あげは蝶」(1939年・17歳) (貼絵)

出典：山下浩監修 (2011)『山下清展』(①p.8, ②p.8), 式場隆三郎編 (1961)『山下清・日本の風物』(③p.8)

渡辺実「帽子や机のなかに入れた虫が紙のうえに表現され、清はこれと遊んでいるようで、その姿は美しくさえあった」と回想する。山下清は、虫を捕っては絵を描き、絵を描くことは早くから優れており、虫の絵は「彼を魅了するこの虫に捧げた絵であって、決して先生や友達に見せる為の絵ではな」かったという。

八幡学園で、情操教育の一貫として指で色紙をちぎって貼り付けていく「ちぎり絵」と出会い、これが後に注目を浴びる貼り絵作品の始まりであった。初期の作品は、蝶やトンボ、蜂などの虫が中心であり、色紙を大きくちぎって貼り付ける作品である。子どもらしい作品であるが、しっかりとした素描からは、鋭い観察力もうかがえる。

初期の作品には人物は登場していない。人物が登場するのは学園に馴染んだ頃、1935(昭和10)年頃からであり、作品の題材は、八幡学園入園当初の昆虫から、行事などの学園での出来事、友人との体験をもとにした作品へと変化していく。



④「クリスマス」(1935年・13歳) (貼絵)



⑤「遠足」(1937年・15歳) (貼絵)

出典：④池田満寿夫・式場俊三（1993）『裸の放浪画家・山下清の世界―貼り絵と日記でたどった人生』p.14,
⑤式場隆三郎編（1961）『山下清・日本の風物』p.7

戸川によれば山下清の作品は、「九年から十一年までは云はば習作時代でそれが十一年の冬から十二年の上
半期に於て再び飛躍的な進歩を遂げ十三年になるとすっかり彼のお家芸が、清君の画風が完成されている」と
いう³⁸。

1949（昭和24）年頃より、山下清は生涯で十数点であるが油絵の制作にも挑戦する。その手法は、キャン
バスに直接チューブから出した少量の絵の具を用いて、点描画のように描くものであった。



⑥「ばけ」(油彩)



⑦「群鶏」(油彩)



⑧「富士」(皿絵)

出典：山下浩監修（2011）『山下清展』（⑥p.69, ⑦p.72）、式場隆三郎編（1961）『山下清・日本の風物』（⑧p.19）

寺山（2002）は、多くの幼児にとって人物像は親しみやすく描かれやすい対象物であるのに対して、自閉症
児の幼児期に人物画が描かれていないことを指摘し、それは人に対して関心を向けることが困難であり、人間
の差異がとらえにくかったことを推測している。また式場（1961）は、山下清の作品に登場する人物について
「アンバランスの構図、はり子のような群像。そういえば、かれの遊び自体が、相手とバランスをとろうとしな
い。一種のひとりあそびだ。ここに喜怒哀楽に感情をうごかさぬ、孤独な自然児の姿がある」と評している。

山下清は人間をとらえることが苦手であった。人物を描くことが苦手な理由として「人物は景色とちがって
いつまでもじっとしてくれないので、かきにくい」としている³⁹。山下清の絵の中に登場する人物はパターン
化され、細密度を増した風景が描かれる晩年になっても、そのパターンは変わらなかった。これは山下清の人間
を捉えることの困難さを示していると推察できる。

山下清の貼絵作品には自画像がある。自画像の山下清は、その表情がよく捉えられている。山下清は「自分
の顔だからあまりみともなくかかないようにしようと思っても、鏡をみてかいているうちに自分の顔だとい
うことを忘れて、景色をスケッチするときと同じように自分が感じたままかいてしまうので、できあがった
「自分の顔」をみると大ていこわい顔になってしまう」⁴⁰と述べている。



⑨「自分の顔」(1950年・28歳)(貼絵)

出典：山下浩監修(2011)『山下清展』, p.68

山下清の貼絵作品のほとんどが紙面いっぱいに色紙が貼りこまれている。そのような山下清の貼絵作品は、完成まで大抵2週間程度かかったという。根気のいる作業を、毎日決められた時間に行った日記につける習慣と同じように、絵にもその裏に克明に制作の日付を書き入れていた。例えば、1954(昭和29)年に制作した「桜島」は完成まで25日間かかっており、絵の裏には次のように記されているという。

三月十四日 一〇：二五～一二：四〇 一三：一〇～一五：五五 一六：〇〇～一七：〇〇(六時間)
十五日 一〇：二〇～一二：一五 一三：〇〇～一七：〇〇(五時間五五分)
十六日 一〇：二〇～一二：三五 一三：一五～一六：一〇 一六：三五～一七：〇〇(五時間三五分)
(中略)
四月七日 九：四五～一二：三〇 一三：〇〇～一五：〇〇(四時間四五分)
かかった時間(五日と六時間四十五分)
かかった日数(二十五日)

山下清は、開始時間になると作業を始め、集中し、終了時間になるとぴたっとやめたという。完全に没頭し、傍らに人がいようと全く意に介しない集中力で、根気よく作品を仕上げていった。山下清には、つよいこだわりと高い集中力があつたことが、作品からも確認ができる。



①「江ノ島」(1949年・27歳)(貼絵)



②「桜島」(1954年・32歳)(貼絵)

出典：①式場隆三郎編(1961)『山下清・日本の風物』p.12, ②山下浩監修(2011)『山下清展』p.93

前述のように、山下清は放浪時代から晩年まで旅先で絵を描くことはほとんどなく、実家や学園にもどってから貼り絵の制作を行っていた。すなわち山下清の作品は記憶によって描かれたのである。例えば「トンネルの風景」（1949年制作）は、放浪からもどって旅先で見た風物を思い出しながら制作したもののひとつである。この絵がどこの風景なのか、山下清自身は地名に関することは覚えていなかった。この作品は茨城県と福島県の境の「勿来の関」近くのトンネルを描いたものであったが、たまたま地域の出身者が作品を見て判明した。「「勿来の関」近くのトンネルの写真を見ると、構図はもとより色合いまでぴたりと一致していた」⁴¹であり、山下清は地名こそ覚えていないが、貼り絵作品として写真として撮ったかのように細部まで正確に再現して見せたのである。

冒頭でも述べたように、山下清はサヴァン症候群であったといわれている。サヴァン症候群に共通するのは「直観像の記憶」であり、山下清は日記の中で「放浪で見物したのは絵にするためではなく、きれいな景色や珍しいものをみたかったから。気に入った景色は何ヶ月もたってからゆっくり思い出して絵にした」と述べている。この「直感像の記憶」によって、山下清は貼り絵作品に臨んでいたと考えられる。

また山下清は、簡単な下書きをするのみで、端から淡々と色紙を貼りあわせていった。山下清を含む八幡学園の子どもたちの貼り絵について、戸川は「紙の上に既に完成した絵がみえてゐるのではないかと思ふ程、彼等には迷ひがない」という。それは生涯にわたって山下清の作品にみられる。1956（昭和31）年から山下清はフェルトペンによる素描をはじめた。フェルトペンで描いた線・点は描き直しができないが、山下清は、濃淡の表現には「点描」を使い、「点描」の密度によって濃淡を表現している。描き損じない表現には、やはり紙の上に既に完成した絵が見えているようである。



①「小石川の後楽園」（1960年・38歳）（ペン画）



②「パリの凱旋門」（1961年・39歳）（ペン画）



③山下清のサイン色紙（制作年齢不詳）（ペン画）

出展：山下浩監修（2011）『山下清展』（①p.84、②p.107、③p.11）

5. おわりに

本稿では、山下清の日記等の分析と作品の検討を通して、山下清が知的障害ではなく、自閉症スペクトラム障害とりわけアスペルガー症候群を有している可能性についての検討を行ってきた。

山下清の作品は経年的に大きな変化がみられた。幼少期には昆虫の絵を好んで描き、人物が表現されるのは

八幡学園になじんだころからであった。初めは山下清自身であると思われる人物のみであったが、次第に友人・先生など身近な人々が描かれ、お祭りや遠足などは大勢の人々が描かれていった。しかし人物画に関しては、児童期からの成長はみられるものの、パターン化され、風景画や静物画に比べて記号的であり、本人自身も人間をとらえることが苦手であると述べている。

山下清はサヴァン症候群であったと指摘されているが、サヴァン症候群に共通するのは「直観像の記憶」であり、この「直感像の記憶」によって、山下清は作品制作に臨んでいたと考えられる。

また山下清は、作品制作の開始時間になると作業を始め、集中し、終了時間になると直ちにやめたという。完全に没頭し、傍らに人がいようと全く意に介しない集中力で、根気よく作品を仕上げていった。山下清には強いこだわりと高い集中力があったことが、作品からも確認ができる。自閉症児の描画表現の特徴として、①限られた対象への関心の強さ、②視覚記憶の特徴を反映した写実的な表現、③独特な絵画表現、④イメージの合成・展開、⑤感情の表出の5点が指摘されているが、山下清の作品はそうした特徴とも多くの共通点がみられる。

以上に検討したように、山下清の日記等の分析と作品の検討を通して、山下清は知的障害ではなく、自閉症スペクトラム障害とりわけアスペルガー症候群を有している可能性があることが示された。

参考文献

- 1 徳山詩織 (2007) 内外のうごき 障害者アートが「芸術」になる日ー「アール・ブリュット・コレクション館長来日プロジェクト」に同行してー、『さばーと』第54巻1号, pp.45-49。
- 2 太田好泰 (2001) 障害者の表現活動の現状と課題ー支援者の立場からー、『教育と医学』第49巻12号, pp.1058-1065。
- 3 服部正 (2003) 『アウトサイダー・アートー現代美術が忘れた「芸術」ー』光文社新書, p.17。
- 4 同上書, p.16。
- 5 山下浩 (2000) 『家族が語る山下清ー夢見る清の独り言ー』並木書房, p.2。
- 6 西垣籌一 (1996) 『無心の画家たちー知的障害者寮の30年』日本放送出版協会, p.5。
- 7 服部正 (2003) 前掲書, pp.103-104。
- 8 西垣籌一 (1996) 前掲書, p.16。
- 9 小出由紀子 (1995) 見て驚け！知的障害者が開く知られざる芸術世界、『芸術新潮』新潮社, p.66。
- 10 小出由紀子 (1995) 前掲, p.75。
- 11 ダロルド・A・トレッフアート著、高橋健次訳 (1990) 『なぜかれらは天才的能力を示すのか』草思社, p.21。
- 12 ダロルド・A・トレッフアート著、高橋健次訳 (1990) 前掲書, pp.21-23。
- 13 式場隆三郎 (1962) 山下清の表現、『児童心理』第187号, p.98。
- 14 村瀬学 (2006) 『自閉症ーこれまでの見解に異議あり！』筑摩書房, pp.161-162。
- 15 戸川行男 (1940) 『特異児童』目黒書店, p.70。
- 16 山下清 (1979a) 『裸の大將放浪記 第一巻』ノーベル書房, p.26。
- 17 山下清 (1979a) 前掲書, p.352。
- 18 山下清 (1979d) 『裸の大將放浪記 第四巻』ノーベル書房, p.282。
- 19 戸川行男 (1940) 前掲書, p.63。
- 20 戸川行男 (1940) 前掲書, p.63。
- 21 戸川行男 (1940) 前掲書, p.66。
- 22 山下清 (1979d) 前掲書, p.183。
- 23 山下清 (1979d) 前掲書, pp.256-257。
- 24 サンマーク出版編集部編 (2000) 『山下清のすべてー放浪画家からの贈りもの』サンマーク出版, p.95。
- 25 山下清 (1979d) 前掲書, p.289。
- 26 渡辺実 (1958) 山下清を創った人々、『文芸春秋』第36巻5号, p.295。
- 27 戸川行男 (1940) 前掲書, p.60。
- 28 戸川行男 (1958) 異常感覚と芸術ー山下清とその周辺ー、『群像』第13巻3号, p.194。

- 29 戸川行男（1940）前掲書, p.56。
- 30 山下浩（2000）前掲書, p.69。
- 31 サンマーク出版編集部編（2000）前掲書, pp.148-150。
- 32 山下清（1979d）前掲書, p.204。
- 33 山下浩（2000）前掲書, p.82。
- 34 山下浩（2000）前掲書, p.94。
- 35 山下清（1979d）前掲書, p.183。
- 36 山下清（1998）『日本ぶらりぶらり』筑摩書房, p.106。
- 37 寺山千代子（2002）自閉症児・者の描画活動とその表現, 『臨床描画研究』第17号, pp.5-21。
- 38 戸川行男（1940）前掲書, pp.71-72。
- 39 山下清（1997）前掲書, p.182。
- 40 山下清（1997）前掲書, pp.185-186。
- 41 山下浩（2000）前掲書, p.16。

山下清と自閉症スペクトラム障害(アスペルガー症候群)に関する検討

Study on Kiyoshi YAMASHITA from the Perspective of Autism Spectrum Disorder and Asperger Syndrome

山本 由佳^{*1}・石川 衣紀^{*2}・高橋 智^{*3}

Yuka YAMAMOTO, Izumi ISHIKAWA and Satoru TAKAHASHI

特別ニーズ教育分野

Abstract

This study examined that Kiyoshi Yamashita had autism spectrum disorder especially Asperger syndrome, not intellectual disability, through the analysis of his diary and works.

The works of Kiyoshi Yamashita had changed successive and greatly. He had drawn many insects of his own accord in childhood, and he drew persons when he adapted himself to Yawata Gakuen. He drew the only person who seemed to be himself at first, and after that, he drew close persons like friends and teachers. Furthermore, he drew many persons at festival and excursion. However, in terms of his portrait paintings, although he had made progress in drawing from in childhood, his portrait works had been patterned and symbolic against landscapes or still life. In addition, Yamashita said also that he was weak in capturing a person.

It was said that Yamashita had Savant syndrome. Then, people with savant syndrome have “memory by figure of intuition” in common, and it is believed that Yamashita also created his works through the “memory by figure of intuition.”

Yamashita was so strict about the time of creation of works. He had got through with his work patiently in spite of other person's presence. He was absorbed in his work with high concentration, and that is obvious through his works.

Following points were indicated as characteristics of paintings drawn by children with autism, and his works had in common. 1. High interest in limited objects, 2. Realistic rendering through the visual memory, 3. Inimitable rendering of painting, 4. Composition and unfolding of images, 5. Expressing an emotion.

According to the above results, it was examined that Kiyoshi Yamashita had autism spectrum disorder especially Asperger syndrome possibly, not intellectual disability, through the analysis of his diary and works.

Keywords: Kiyoshi Yamashita, Asperger Syndrome, Savant Syndrome

Department of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

*1 Tokyo Gakugei University Affiliated School for Children with Disabilities (1-6-1 Hikawa-dai, Higashikurume-shi, Tokyo, 203-0004, Japan)

*2 Nagasaki University (1-14 Bunkyo-cho, Nagasaki-shi, Nagasaki, 852-8521, Japan)

*3 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

要旨： 本稿では、山下清の日記等の分析と作品の検討を通して、山下清が知的障害ではなく、自閉症スペクトラム障害とりわけアスペルガー症候群を有している可能性についての検討を行ってきた。

山下清の作品は経年的に大きな変化がみられた。幼少期には昆虫の絵を好んで描き、人物が表現されるのは八幡学園になじんだところからであった。初めは山下清自身であると思われる人物のみであったが、次第に友人・先生など身近な人々が描かれ、お祭りや遠足などは大勢の人々が描かれていった。しかし人物画に関しては、児童期からの成長はみられるものの、パターン化され、風景画や静物画に比べて記号的であり、本人自身も人間をとらえることが苦手であると述べている。

山下清はサヴァン症候群であったと指摘されているが、サヴァン症候群に共通するのは「直観像の記憶」であり、この「直感像の記憶」によって、山下清は作品制作に臨んでいたと考えられる。

また山下清は、作品制作の開始時間になると作業を始め、集中し、終了時間になるとぴたっとやめたという。完全に没頭し、傍らに人がいようと全く意に介しない集中力で、根気よく作品を仕上げていった。山下清にはつよいこだわりと高い集中力があったことが、作品からも確認ができる。自閉症児の描画表現の特徴として、①限られた対象への関心の強さ、②視覚記憶の特徴を反映した写実的な表現、③独特な絵画表現、④イメージの合成・展開、⑤感情の表出の5点が指摘されているが、山下清の作品はそうした特徴とも多くの共通点がみられる。

以上に検討したように、山下清の日記等の分析と作品の検討を通して、山下清は知的障害ではなく、自閉症スペクトラム障害とりわけアスペルガー症候群を有している可能性があることが示された。

キーワード： 山下清、自閉スペクトラム障害、アスペルガー症候群、サヴァン症候群